

EGFR-TKIによる皮膚障害に対する非小細胞肺癌患者の セルフマネジメントの実態に関する調査研究

慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科
看護学専修がん看護分野 修士課程 2年 國友香奈

1. 背景

肺癌は日本人のがんによる死亡原因の第1位であり、今後も高齢化の影響を受けて増加していく傾向にある。近年、がん細胞に特異的に発現する分子をターゲットとした分子標的治療薬の開発が進んでいる。上皮成長因子受容体チロシンキナーゼ阻害薬（epidermal growth factor receptor-tyrosine kinase inhibitor: EGFR-TKI）は肺癌に対する分子標的治療薬として、従来の細胞障害性抗がん剤と比較して有効性が示されており、EGFR 遺伝子変異陽性のIV期非小細胞肺癌の標準治療となっている。EGFR-TKIの主な副作用として皮膚障害がある。皮膚障害の発現頻度は高く、重症化した場合には治療の休止や薬剤の減量が必要となる。その一方で、皮膚障害は治療効果の予測因子であることが報告されている。すなわち、患者にとって皮膚障害の重症化は治療効果を示す指標であり、治療中断に至らないようマネジメントして行くことが重要となる。さらに、皮膚障害によるボディイメージの変化は、患者の精神状態や社会生活にネガティブに影響することが報告されている。EGFR-TKIによる皮膚障害は、がん治療の継続に関わる副作用であり、患者のQuality of Life（以下QOL）を低下させる。皮膚障害の重症化を予防していくためには、患者自身がその必要性を認識しマネジメントして行くことが基盤となる。

2. 目的・意義

研究目的は、EGFR-TKIによる皮膚障害に対する非小細胞肺癌患者のセルフマネジメントの実態を調査し、セルフマネジメントの実践とQOLの関連を検討することである。研究意義は、EGFR-TKIによる皮膚障害に対して、セルフマネジメントをしていくことが求められる肺癌患者とその家族への支援を検討していくための資料を得ることである。

3. 方法

調査は500床以上の都道府県がん診療拠点病院1施設で実施した。EGFR-TKIによる治療を継続している非小細胞肺癌患者73名を対象に、質問紙と診療録による横断調査を行った。セルフマネジメントの実態は研究者が作成した質問紙を用い、皮膚障害特異的QOLはSkindex29、健康関連QOLはSF-8（アキュート版）を使用して調査した。

4. 結果・考察

適格基準を満たした73名に研究参加の同意を得て調査を実施した。有効回答率は97.3%（71名）であった。2名の対象者は回答の欠損が多く、分析対象から除外した。対象者の概要を表1に示す。性別は女性が76.1%を占め、年齢の中央値は68歳であった。居住形態は独居が12.7%であり、収入のある職業に就いている者は21.1%であった。治療期間の中央値は8ヶ月であった。

皮膚障害の実態は、調査時における対象者の主観的認識と医師による客観的評価を調査した。調査時は、対象者の 91.5%がいずれかの皮膚障害があると認識していた。また、対象者の 67.7%が4種の皮膚障害のうち3種以上の症状があると認識していた。複数の症状を認識している者は、皮膚障害による日常生活への支障を強く認識していた。

治療期間別にみた皮膚障害の客観的評価を図 1 に示す。ざ瘡様皮疹は、治療期間が 6 ヶ月未満の対象者 (n=26) の 80.8%に症状があり、他の治療期間と比較して頻度が高かった。皮膚乾燥は、いずれの治療期間も対象者の 50%以上に症状があった。掻痒症は 6 ヶ月未満の対象者 (n=26) で 19.2%、6 ヶ月以上 12 ヶ月未満の対象者 (n=22) で 54.5%、12 ヶ月以上の対象者 (n=23) で 47.8%であった。12 ヶ月以上の対象者 (n=23) では、他の治療期間と比較して重症度の高い Grade2 の割合が低い傾向にあったが、ざ瘡様皮疹と皮膚乾燥は 50%以上が皮膚障害を経験していた。

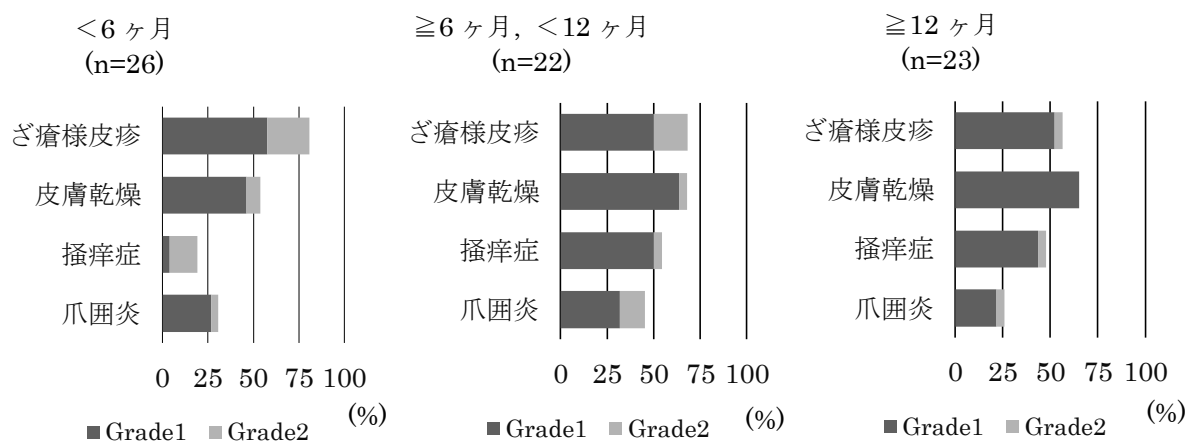


図 1. 治療期間別の皮膚障害

スキンケアの実施に対する評価が高い群で皮膚障害特異的 QOL は低かった。すなわち、スキンケアに積極的に取り組んでいる者は、皮膚障害による日常生活への支障を強く認識していた。

5. 結論

皮膚障害に対するスキンケアの評価が高い群は、皮膚症状による日常生活への支障をより強く認識していた。EGFR-TKI による皮膚障害は、治療経過によって複数の症状が重複して発現していく特徴があり、患者はスキンケアに取り組まざるを得ない状況におかれていた。EGFR-TKI による治療を継続していく患者は、多様な皮膚障害を経験するなかでスキンケアを強化し、症状に応じて効果的なケアを選択していくことが求められる。

6. 今後の研究成果の活用について

患者が治療継続の過程で皮膚障害による日常生活への支障を経験しながらもスキンケアの効果を認識できるよう働きかけていくためのアプローチについて考察を進めていく必要がある。今回の研究成果をセルフマネジメントの継続をサポートしていくための具体的なシステム構築につなげていきたい。